

資料と通信

じんるいがくフェスティバル報告

高倉浩樹・川口幸大・曾我亨・坂井正人

2010年度第二回東北地区研究懇談会として、「じんるいがくフェスティバル」を開催した。この企画は、互いに離れているために疎遠になりがちな東北地方の各大学で人類学を学ぶ学生の交流そして人類学を教育する教員同士の交流を促進するために企画されたものである。

本小論では、この企画がどのような目的をもって行われ、どのように準備されたのか、参加した学生はなにを得たのか、そして最終的にはなにを達成したのかについて報告したい。

1. 目的と概要

2010年10月16日(土)に東北大学川内キャンパスで「じんるいがくフェスティバル—人類学および隣接分野をまなぶ学生と教員の大学間交流」を開催した。この企画は文化人類学会学会員と東北地区の大学で人類学を学ぶ学生の交流を目的としたものである。

東北地区といっても、例えば青森県と福島県を結べば、東京-大阪間に匹敵するほど距離があり、交通の便からすると地区内のどこかに集まるより、東京の方が楽という事情がある。そのため地区全体で懇談する機会を設けることは難しかった。こうした事情は東北地区に限ったことではないことかもしれない。今期の東北地区では理事の高倉に加えて、弘前大学の曾我亨氏、山形大学の坂井正人氏、東北大の川口幸大氏に幹事を引き受けていただき4人で企画を検討する体制を整えた。立教大学で開催された2010年度の研究大会で会合をもったが、そこで各大学の学部生に対して人類学のおもしろさを伝えるような企画を通して交流するという提案が出されたのである。フィールドワーク実習などで学ぶ学生から報告等をしてもらい、各大学の学生がどのように人類学を学んでいるかを、相互に知る機会を設けようとなった。

その後、関係者の中でメール会議を続けながら、最終的に決まったのが、「じんるいがくフェスティバル」という名称であり、学生の発表・教員と学生のグループによるセッション・懇談会という三部構成の番組だった。東北地区研究懇談会の企画としては、教員やポスドク、大学院生などからなる学会員に対して、学部で人類学を学ぶ学生との交流の機会を提供するものとして位置づけた。また学生に対しては、文化人類学のオープンキャンパスとして参加を呼びかけた。

当日は午後1時、第一部「フィールドワーク実習はたのしい—学生研究発表会」で幕が開けた。これは各大学から数名ずつ発表者を募り、最初に口頭で発表者の自己紹介とセールスポイントを発表してもらい、その後ポスターセッションを実施した。各大学の発表は以下の通りである。(1)「ムカサリ絵馬と結婚観」伊藤瑛・山形大4年、(2)「内モンゴル自治区のモンゴル人アイデンティティ」成田慧・山形大4年、(3)「大間生活史調査—なぜ人は出稼ぎをするのか」弘前大人生班・2/3年(芦澤佳奈、瓜田史花、小野寺薫、佐々木湖乃美、佐藤巧弥、佐藤百恵、陳欣、船橋千尋、星川溪、村山彩香、四橋歩実、浅野香織、三上史矩)、(4)「みちのく、春のウグイ漁—川漁師の役割分担」弘前大岩木川班・2/3年(小笠原絵理、寺島圭、村上大樹、稲井美理亜、大川麻里菜、柏谷諒、鈴木拓斗、種市潤、山本美希)、(5)「現代を生き抜く職人の世界」弘前大仕事班・3年(櫛引咲子、庄山早希)、(6)「<生きがい>をつくるシニアたち—仙台NPO法人を事例に」金川昌太郎・東北大4年、(7)「<石巻茶色い焼きそば>をつくりだす—地域グルメの対象化についての一考察」佐藤幸亮・東北大4年、(8)「<文庫>の人類学的研究—母親が集う場の一考察」成田梨加・東北大4年、(9)「仙台パフォーミングアートのフィールドワーク—アートにかかわる人々のライフスタイル」山際一輝・東北大4年、(10)「外国人花嫁のライフヒストリー」移川美由紀・東北学院大4年、(11)「アメリカの大学社会におけるLGBT」佐藤佐喜子・東北学院大4年。個人発表・グループ発表双方があったが、文化人類学を学んだ学部生が自分自身でどのような課題を見つけ出し取り組んでいるのかがわかり大変興味深いものだった。

第二部は「じんるいがくの魅力をめぐる本音トーク—学生と教員によるグループ・セッション」を行った。これは事前に提出された学生参加者名簿を元に、6組にクラス編成を行い、そこに所属や調査地域の異なる二人の教員=学会員をいわば担任のように配置して

行われた。教員はいわば対談する形式で、互いの自己紹介をおこない、なぜ人類学者になったのか、調査地でどのような暮らしをしているのか、調査地で楽しいこと、つらいことなどを話しながら、学生にも加わってもらうフリートークが行われた。アドリブで行われるので多少難しい面もあったが、同僚との会話を学生にみせると同時にそこに巻き込むという経験はなかなか刺激的であった。

第三部は生協での懇親会である。会場内では、飲み物や食べ物を持ちながら小さなグループがいくつもでき大いに盛り上がった。弘前大グループはバスで戻ることもあり、5時半にはフェスティバルを終了し、解散となった。

秋晴れの好日のなか、弘前大学から 29 人、山形大学から 22 人、東北学院大学から 6 人、東北大学から 34 人と合計 91 人の学生が参加し、これにくわえて学会員（教員等）は 11 人が加わり大変な盛会であった。

（以上、『文化人類学』75-3号(2010)より再録）

2. 準備の過程

(1) 東北大学の場合

川口幸大

文化人類学フェスティバルでは、東北大からは 4 人の学生がポスター発表を行った。全員が文学部の文化人類学専修に在籍する 4 年生の学生である。

東北大文学部の学生たちは、2 年生より各専修に分かれ、専門分野について本格的に勉強を始める。文化人類学専修では、特に 3 年時に取り組む「文化人類学実習」が最も重要な科目となっている。各々の学生が、独力で調査対象を探し、コンタクトを取り、約半年かけてフィールドワークを行い、その結果を『実習報告書』としてまとめるのである。まさに人類学の醍醐味を実感できる授業だが、時間と労力と行動力を要し、それゆえに苦勞する学生も多い。それでも大半の学生はどうか報告書の執筆にこぎ着け、例年おおよそ 8 割の学生が実習のテーマを発展させて卒業論文を執筆する。今回発表を行った学生たちも、みな目下卒業論文を作成中であり、そのテーマも、一人を除いて、3 年次の実習から継続的に取り組んでいるものである。

文化人類学フェスティバルの企画が固まった7月中旬、発表者を募るメールを学生に出した。こちらとしてはみなに発表してほしいが、時間の都合上それは難しいので、自ら手を挙げてきた学生を優先させることにした。結果として4人が発表することになったが、みなもちろんポスター発表は未経験である。そこでまずは7月末に発表者たちと会合を持ち、とにかくフィールドワークの状況を分かりやすく伝えること、そこから何を言いたいのかをはっきりとさせることをアドバイスした。夏休みの間、各自で準備を進めておくこととし、9月中旬にあらためて集まることにした。

夏休みが終わって9月に集まったときには、みなフィールドワークは進んでいるが、ポスターの制作も含めて、「どう伝えるのか」について悩んでいるようだった。ちょうど9月28日には研究室全体での卒業論文の中間報告会があるので、とりあえずはそれに向けて準備をし、そこでの反応を参考にしてポスターを作ってみようということにした。

卒論中間報告会から約10日後10月8日、草案段階のポスターを前にしたリハーサルを行った。言っていることとポスターの内容がかみ合っていなかったり、ポスターに情報を詰め込みすぎていたり、話のポイントがいまひとつはっきりしなかったりと、さまざまな課題が出た。本番の3日前には業者に原稿を出さなければならない。話すことは本番までに調整できるが、ポスターは印刷してしまうと変更がきかない。少しでもよいポスターになるようにと、締め切りまでにさらに2回のリハーサルを行った。

どうにか業者に印刷を発注し、本番2日前にポスターが仕上がってきた。それを前にして、合計3回のリハーサルを行った。とにかく簡潔で分かりやすい話し方ができるようになることと、質問に対して過不足なく答えられるよう準備すること、の2点を心がけた。本番に向けてみな緊張が高まり、気分が高揚しているのが分かった。

また発表の準備だけではなく、当日の一週間前からは、他の参加者たちと当日の役割分担も行った。バス誘導、受付、会計、カメラ、タイムキーパー、会場案内、懇親会会場の準備といった係を決めた。当日は開始の3時間前に集合し、直前の準備はみなで行うことにした。

本番は、ポスターのパネルが風で倒れたり、懇親会会場が人数に対して狭くて移動が難しかったり、あるいは料理があつという間になくなったりといった問題点もあったが、全体としては大過なく、いや大きな成功のうちに、エンディングを迎えたと言えよう。

発表者たちも、何よりも生き活きとポスターの前に立ち、質問に答えていた。終了後の疲労感と充実感でいっぱいのその姿こそ、文人フェスの成功を何より物語っていたように思う。

3. 学生たちの声

参加した学生から得られた感想は以下の通りである。各大学それぞれ自由な形で感想を集めたので、体裁が大学毎に異なっているが、生の学生の声を伝えるということでそのまま掲載する。

(1) 山形大学

山形大学からは3人の学生がレポートのような形式で参加感想記を送ってくれた。

成田慧 (4年生)

a. 複数の学校が参加する事

普段人類学をやっている学生と接する機会はほとんど無いので、今回良い刺激になりました。卒論の進め方や色々なテーマに触れることが出来たので良かったです。自分の学校では見られない地域色の強いテーマなど、大変興味深いものがたくさんありました。

b. 文化人類学の先生との座談会

自分の大学の先生以外とはほとんど接する機会がないので、これも良い刺激になりました。全員が対象とする地域が異なるため、お話を聞くだけでも世界の文化に触れられたような感じがしました。また、フィールドの具体的な方法や、個人的な質問にも答えて頂いたので、勉強になりました。個人的な感想になりますが、以前から本で名前を拝見しただけの瀬川先生とお話できたのは感激でした。

c. 交流会

お酒まで出るとは思っていなかったので、正直びっくりしましたが、そのおかげで初対面の学生とも打ち解ける事が出来ました。ちょうど小腹が空く時間帯だったこともあってよかったと思います。用事があったため、散会后にすぐ帰宅したのですが、後片付けを東北大の人だけにお任せしてしまったのはちょっとご迷惑だったかな、と思いました。申し訳ありません…。次回は全員で片づけられる様な決まりにしてみると良いのかも知れま

せんね。

d. 次回以降改善して頂きたいと感じたこと

・発表場所の変更

風が強く、ポスターがはがれてしまい、見学者の方にご迷惑をかけてしまいました。壁のある所をお願いしたいです…。

・発表スケジュールの決定

実は自分のポスターに人が集まって来たのを見て、他の方の発表を満足に見る事が出来ませんでした。「席をはずします」という旨を書いてはいたのですが、やはり気になってしまいました。大学ごとに時間を設けてローテーションで回す方法など、何かしらの対応をお願いしたいです。(A大学の発表中、B、C大学の発表者は見学に徹する、など。)

もう少し質問したかったこともあったので、ちょっと残念でした。

・座談会の時間をもう少し長くすることと、場所の確保

時間が短く、全員が質問する事が出来なかったため、もう少し時間を取って欲しいと思いました。折角の機会なので、たくさん質問したかったです。あと、外でやったグループが寒かった、と言っていたのを聞いたので、次回はどの季節に開催されるかわかりませんが、雨天時のことも考えて全グループが屋内に入れるようにして頂きたいと思いました。私達のグループとかち合っ外に出られたグループがあったので、ちょっと申し訳なかったです。

・各大学への早期連絡

実はあの発表ポスターは2日前に徹夜で作成したものでした。私達の大学は10月10日の中間発表が終わった後に発表者が決定したため、準備期間が短く、正直大変でした。坂井先生のお考えもあったのかも知れませんが、どの様な内容のポスターを作れば良いのかも私達には良く伝わっていなかったため、急いで仕上げましたが、正直あの内容には満足していません。もう少し早く連絡を頂けたら準備にも時間をかけられたのではないかと考えています。各大学の卒論の進め方に差異があるとは思いますが、もう少し早めの連絡をお願いしたいと思いました。

加藤亜梨沙 (3年)

a. 参加してよかったこと

この企画に参加してよかったと思う点は3つある。1つめは、他の大学では文化人類学の研究対象をどんなものになっているのかを知ることができたことである。

今まで、山形大学の先輩の卒業論文は何回か聞く機会があった。先輩方の卒業論文を聞くだけでもどんなものを(文化人類学・宗教史の)卒業論文の題材にすればよいのか、どんな点に着目すべきなのかがなんとなくわかった。しかし、今回、他の大学の方々のパネルでの発表をきき、また質問する機会をもてたおかげで、研究の題材として考えられるものの幅を広げることができたと思う。

個人的には、宮城県の「個人宅を地域の図書館の代わりにする」という仕組みについての発表が面白かった。山形にもそういった仕組みが存在する地域があるのか気になった。

2つめは、実際に海外へフィールドワークに行っている方々(自分の大学以外の先生)の話を知ることができた点である。現地で苦労した話などを聞くのも楽しかったが、卒論のテーマについてのアドバイスをもらうことができ、とてもためになった。

3つめは、他の大学の学生と話をする機会を持てたことである。参加する前は、本当は第三部にあまり出席したくなかった。しかし、実際に行ってみると、第2部で自分がした質問に興味を持って話しかけてくれる(意見をくれる)人がいたり、お互いの大学の授業内容の違いについて話すことができたりと、想像以上に楽しい時間を過ごすことができた。また、第2部で質問したりなかったことを先生方に質問することもできた。

b. 改善したらよいこと

改善した方がよいと感じた点は2つある。1つは現地への移動の仕方である。今回、山形大学の学生は現地集合であったが、それだと受付がスムーズにできないようであったので、他の大学のように、学生同士まとまって行動した方がよかったのではないかと感じた。それにより、遅れてくる学生の把握などもしやすくなると思う。

2つめは第2部に使われる時間である。1で書いたように、第2部は他の大学の先生方に質問することができ、たいへんためになった。しかし、3、4人が質問するとすぐに時間が過ぎてしまった。他のグループの中には、全員の自己紹介をただけで時間になってしまったところもあったという。せっかくの機会なので、できることならもう少し長く質問

し、話を聞くことのできる時間が欲しかった。

本間海

a. 参加して良かったこと

ポスターセッションは、他大学の人類学や社会学を専攻している学生が、どのようなことに興味を持って学んでいるかを知れて良かったです。こんなことも人類学に当てはまるのか、という驚きが多々ありました。また、弘前大学のグループ研究がおもしろく、機会があれば自分達もやってみたいと感じました。

グループセッションは、それぞれの先生の人類学を始めるきっかけや、フィールドへの入り方、フィールドに入っている時の意識など、普段なかなか聞けない実践の話を知ることができ、貴重な経験ができたと思います。個人的には、フィールドワークに行った時に現地の皆さんに「何を調べているのか？」と聞かれた際の答え方を聞いたので、参考にしたいと思いました。

懇親会は、他大学の方とお話する機会がめったにないので、普段の学生生活のことなども含めて聞いてよかったです。予想外にお酒や食べ物がたくさん出されたので、おいしくいただきました。

b. 改善したらよいこと

ポスターセッションについて、大学によってポスターの形式が異なっていたため、最初の5分足らずの説明と一見しただけでは全体像がつかみにくく、質問もしにくい場合があります。形式をある程度統一したら良いのではないかと感じました。

グループセッションでは、私たちのグループは普通の教室で行ったので、先生方との距離があり、最初は質問をしにくく感じました。できれば、互いに学生や先生の顔が見える並び方だと良いと思いました。意外と時間が早く過ぎたので、もっと時間を長くしてもいいのではと思います。

懇親会は、席も決まらずに自由でしたので、自分の反省点でもありますが、同じ大学同士で固まっていることが多かったです。もし可能ならば、最初だけ適当に学校がばらけるように、席を割り振っても良かったかもしれません。グループセッションのグループ分けのまま懇親会に移ってもいいかなと思いました。30分後ぐらいから自由行動にするなど、

段階があつたらいいと感じました。

c. その他気付いたこと

ポスターセッションは、発表者がほとんど自分の解説で時間がとられて、他の発表を見られなかったそうなので、ある程度タイムスケジュールを定めたらいいと思います。全体の進行を担当していた高倉先生が、声を張り上げて次の動きを説明をなさっていたので、司会者の負担軽減にもつながると思います。

今回のフェスティバルを通して、フィールドワークに対する興味が大きくなりました。今後もこのような機会があるとうれしいです。

(2) 弘前大学

弘前大学の場合、参加者全員が、それぞれのセッション毎に感想を書いたもので、それを以下のように整理した。

a. 第一部ポスター発表：どの発表のどの点が面白かったか

- ・町づくりに興味があるので、「文庫」の人類学的研究、「茶色い焼きそばを作り出す」の話がきけてよかった。
- ・「ムサカリ絵馬」の発表がおもしろかった。死者と結婚させるという考え方が新しい考え方でとても新鮮だった。
- ・仙台の NPO 法人についての研究がおもしろかった。「生き甲斐」の指標や話がやや不透明だったが、NPO が新たに NPO を生み出す可能性は興味深かった。
- ・「ムサカリ絵馬と結婚観」の発表がおもしろかった。死者を絵馬のなかに描くことで結婚させるという行事が現代にも存在しているという点が興味深かった。
- ・「ムサカリ絵馬と結婚観」の発表で、この儀式が今でも続いている点や、ムサカリ絵馬専門の絵師が以前いたという点がおもしろかった。
- ・「文庫」の発表がおもしろかった。弘前でそういう活動をしているのをみたことがないし、図書館でも保育館でもないそんな空間に興味をもった。あと「ムサカリ絵馬」の発表もとてもおもしろくて、弘前の人形でもそういうものがあるらしいという話も聞いたので、個人的に調べてみたいと思いました。両方とも積極的に質問できました。
- ・「アメリカの大学社会における LGBT」がおもしろかった。LGBT は以前から興味があ

る分野だったので、イントロの時から気になっていた。調査者独自の男女の特徴のふりわけなど調査では観察を何よりも重要にしてるところがよかった。交流はとくにしなかった。

・自分の班の発表であまり積極的に発表できなかったことが残念だった。発表者の人たちがそれぞれ興味関心にしがって調査をしていることはわかったが、自分は正直にいうとあまりどの発表にも興味をもてなかった。

・「外国人花嫁のライフヒストリー」がおもしろかった。韓国人の花嫁同士でも仲はあまりよくないみたいな話をしていて、その点が意外でおもしろかった。質問をして交流した。

・「ムサカリ絵馬と結婚観」が興味深くて、民俗学的にもおもしろいと思った。初めて聞く風習で興味がわいた。

・「文庫」についての研究がおもしろかった。私にとって文庫というものはあまり身近ではなかったのですが、仙台市内のある地域では非常に地域に根付いたものであるということがわかり、本を読む場としてだけでなく、他の機能もあるところがおもしろかったです。発表者と直接会話しました。

・「ムサカリ絵馬と結婚観」がおもしろかった。死者の結婚という普段では絶対にあり得ないことを研究対象としていて、でもこれは今現在もおこなわれているというのはおもしろい。

・どの発表も着眼点がとてもおもしろかった。とくにムサカリ絵馬は写真があり見ていて分かりやすかったし楽しかった。

・自分が一番興味をそそられたのは、東北大の佐藤さんの発表だった。今話題のB級グルメを題材に地域の活性化などの話につなげていくのがおもしろかった。

・自分たちのポスター発表を説明するのがおもしろかった。みんな興味津々にうんうんとうなづいて聞いてくれるので、説明しがいがあった。自分たちの研究に誇りがもてた。他の発表はあまり聞かなかったです。

・「文庫」の発表がおもしろかったです。「文庫」ということを知らなかったので、このような場もあるということに興味をもちました。

・「茶色い焼きそばを作り出す」がおもしろかった。調査の結果、日本がどう変わったかという結論がおもしろかった。自分が発表した際には、東京大の菅さんの川の漁についての論文が参考になるとアドバイスしていただき為になった。

- ・「ムサカリ絵馬と結婚観」の発表が興味深かった。個人情報に関連して社会問題化したという話があり、それにも関わらずまだ続いているという点がおもしろかった。
- ・「文庫」の人類学研究がおもしろかった。母親が給与なしでボランティアとしての文庫の貸し出しを行っている点などがおもしろかった。疑問に思ったことを質問した。
- ・「外国人花嫁のライフヒストリー」がおもしろかった。わからないところを質問したりして交流した。
- ・人が混みあっていて東北学院大の学生2人の発表しかじっくりみれなかった。LGBTの研究をしている人の発表がおもしろかった。アメリカでの当事者の考え方、自覚の仕方が聞けた。
- ・発表していてほとんど他の発表がみれなかった。途中から話しかけるのにも戸惑った。かつてに見て回って、興味があるのがふらっとみれてよかった。
- ・「内モンゴル自治区のモンゴル人アイデンティティ」と「外国人花嫁のライフヒストリー」の発表に興味をもった。私は卒業論文で留学生のアイデンティティについて書く予定なので、興味深かった。

b. 第二部グループセッション：どんな話が面白かったか

- ・社会調査についての不安・おもしろいところ・大変なところについて話し合いました。4年生や教授の方々も、自分たちと同じような不安をもっていて参考になった。
- ・他の学校が2年生でフィールドワークをしていないと知って、うちの大学は早くにやっけていて大変だとおもったが、反面とてもすばらしいと思った。
- ・2人の教授の話に差があったりして、場所によって方法ややり方など千差万別なのだとわかりました。
- ・主に自己紹介で時間をつかってしまったので、あまり人類学的なくわしい話はきけなかった。しかし院生の方や卒論のテーマに関する内容のお話がたくさんできて参考になりました。
- ・同じ題材で中国とアフリカでの違いについての話がおもしろかった。食事の話やトイレの話が印象的だった。
- ・外国で研究を進めるとき、そこの文化に慣れず、また日本に帰ってきたら今度は日本の

食べ物が口に合わなかったなどの苦労話がおもしろかったです。

- ・人類学者も調査では苦労をし、調査前は調査にいきたくないと思うことがある。そのような本音を聞いてよかったです。
- ・タイのプーケットでダイビングショップで働きながら調査しているという話が興味深かった。
- ・先生たちが調査にもっていくものを「格好つければフィールドノート」と言っていた話がおもしろかった。
- ・人類学的な枠組みではなされていたのですが、質と量を組み合わせた調査をしてみたいと思いました。スキューバダイビングの話がおもしろかったです。
- ・いろいろなことが聞いておもしろかったが、「一つだけ現地に持っていくとしたら？」や「人類学とは何か」などが特におもしろかったです。
- ・トウルカナでの調査中の生活についてのお話がおもしろかった。
- ・沼崎先生の台湾での餃子の話やカメラの話がおもしろかった。
- ・人類学とは何か。先生方の経験を例にいろいろ話が聞いておもしろかった。
- ・中国の現在の経済状況やフィールドワークで苦労したことが聞いておもしろかった。
- ・普段は聞けないようなフィールドワークのつらさ、おもしろさの話を聞いておもしろかったです。
- ・フィールドワークをやめたくなったときの話などおもしろかった。調査・研究についての考えが聞いて楽しかった。
- ・中国の人がケニアに多く、逆にケニアの人も中国で増えている、という話がおもしろかった。
- ・各班員の研究分野や興味のあることを発表しあって楽しかった。
- ・先生方にいろいろ質問して、たくさんいろいろな話を聞いた。
- ・市野澤先生の観察の方法、人類学の特徴の話がおもしろかった。一年以上、東南アジアのお店で従業員として働きながら、調査したというのにおどろいた。
- ・誰の話というよりも、どんな人がどのようなことに興味を持っているのかが聞いてよかったです。先生の話ではなく自己紹介がメインで、次の懇親会ではなしたい相手を見つけるのに役だった。

・人類学とはどのような学問なのか、フィールドにでるときにはどのようなことに気を付けているのか、などの話を聞いて、社会学と異なる点にあらためて気づくことができた。

c. 第三部懇親会：どのように交流したか

- ・他大学の4年生の方に、卒論について不安なことを相談にのってもらいました。
- ・他の大学と交流することはまずないことなので、学術的な話から大学生活のことまで幅広く話すことができ、とてもおもしろかった。
- ・各大学の方々と話ができ、カリキュラムや特色、研究内容について話を聞くことができた。
- ・山形大の4年生の方たちとお話しました。
- ・4年生の方に卒論のテーマや進め方などを聞きました。あと就活についての話もしてもらいました。
- ・盃を交わしました。
- ・あまり交流できなかった。
- ・他の大学の人たちと卒論のことなどを話した。
- ・お酒を飲みながら楽しく話しました。
- ・山形大の4年生とお話できました。弘前大の岩木川班の人とも交流しました。
- ・とにかく楽しくはなせた。弘前出身の他大学の方と話した。
- ・山形大の人と少し話した。他には弘前大の人生班の人たちといろいろはなせて楽しかった。
- ・疲れて黄昏てしまった。飯がすくなくかった。
- ・他大学の人とそれぞれの大学について話をして交流しました。
- ・山形大学の学生や中国人留学生と交流した。他の大学ややっている卒論の内容など聞けるためになった。高倉先生のシベリアの話がおもしろかったです。
- ・東北大学の学生と話し、仙台の文化の話や東北大学の仕組みなどの話を聞いた。インドのある民族について卒論を書いている人の話が、その研究の出発点しか聞けなかったがためになった。
- ・いろいろな大学の人と話した。

- ・韓国からの留学生や東北大の学生と、大学の話や国の話などをして、とても楽しかった。
- ・東北大の中国からの留学生と、山形大の2人と話した。互いの大学の特徴や、今研究していること、興味があることについて盛り上がった。
- ・B班のポスターの時はなせなくて、私の卒論と似た対象を研究している人がいたので話した。他大学の先生に悩みや不安を話すことができているいろいろ聞けてよかった。
- ・ポスター発表を聞きに行った相手の学生と、どうしてそのテーマに関心を持ったのかについて話しました。他に自分たちの学校についてなど、雑談をして交流しました。

d. 全体として：参加の感想、良かったこと、改善したらよい点など

- ・グループセッションでもっと活発な議論・意見交換があればよかった。先生によっては何をすればよいかわかっていない人もいたので、時間も短いのにもったいないと思った。
- ・まだ初回ということで、どうやらグループセッションが先生方も何をしていいかわかっていなかったようなので、少し題を決めて発表させるとかして活発になればよいと思う。
- ・新たな知見が広がった。来年やるならまた参加したい。
- ・いろいろな大学の方とお話できたので、とても貴重な時間でした。
- ・たくさんの研究を知ることができてよかった。
- ・発表を全部見て回れなかったなので、その時間をもっと増やして欲しいです。人類学フェスティバルに参加して、自分の思い描いている卒論を少し見直そうと思いました。他の人の研究を聞いてとても楽しかったです。ポスター発表で質問しやすい場所づくりもよかったと思います。
- ・質問や交流など各セッションにもっと時間がほしかったです。全体のスケジュールが厳しいと思うので、半日ではなく一日かけてやりたかったです。できるならば。
- ・同世代の人たちがどんなことに興味を持って調査しているのかを知ることができた。よい刺激になったと思う。
- ・山形大や東北大など、普段なかなか交流できない人たちとそれぞれの大学のことなどを話して楽しかった。ポスター発表の時間があまりなくて、1つか2つのポスターしかみれなかったなので、もっと多くのものであった。
- ・様々な知見を得られる場であったので、また開催したら参加したいと思いました。発表

の時間がもうすこし欲しいかなと思います。

・改善点として、班よっての参加度の違いが気になりました。参加してみて普段考えたこともなかったテーマを研究している人がいて、それについて詳しく知ることができたので楽しかったです。(注：弘前からは3班が参加したが、そのなかで、この学生が所属する班の学生は参加者が2名と非常に少なかった。そのことを改善点としてあげている。)

・自分たちの社会調査しかみたことがなかったので、他大学の研究を聞くことができ、今後の卒論のための参考になった。また立食会を通じて交流できたり、グループセッションで教授の話も聞くことができた。

・他大学の発表が聞けたことがよかった。

・ポスター発表という普段はやらないことができてよかった。自分はオープンキャンパスに参加できなかった分、今回、いい経験ができたと思う。(注：弘前では、オープンキャンパスのときに、学生が実習の成果を高校生にポスター形式でプレゼンする。そのことを指している。)

・想像よりもぜんぜんおもしろかった。ただダルいだけだと思っていたが、行ってみると意外にナイス！やっぱり、とりあえず参加するという気持ちが必要なのですね。飯が少ないです。場所が狭いです。

・仙台は遠かったけど、他大学の人の研究を聞けるという貴重な体験ができてよかったです。

・参加してよかったです。

・ポスター発表、グループセッションの時間がともに短かった。あと30分は欲しい。

・他大学の情報をたくさん聞けてよかった。

・グループセッションとかとても為になった。

・ポスター発表が見つらなかったので、もっと広い場所で、もうしこし長い時間をもうけてもらいたいと思った。東北大ということで、おそろおそろ参加したが、雰囲気は和やかで、みんな興味深い発表をしていることがわかって(あまり聞けなかったが)すごく楽しかった。バス移動も遠足みたいだった。

・個人名(インフォーマント)がでてるのが怖かった。外で発表するときには、配慮したほうがよかったと思った。行くのは疲れたけれど、とても満足してかえってこれたので

よかった。本当はもっとゆっくりしたいので、泊まりでもよいと思った。行かなかった2年生に勧めたいとおもった。私も次の機会があれば参加したい。(注:いつも仲間内での発表が多いので、個人情報の扱いが不十分であったことを言っている。また同じ弘前大のなかでも班が異なると話す機会が限られるので、同じ大学のB班と話せたことを書いている。)

・他の大学生はどのようなテーマで論文を書いているのか、知ることができてよかった。卒業論文の内容について他の学生と意見交換することができて意義深かった。

(3) 東北大学

東北大学からは、良かった点と改善すべき点をわけ、それぞれセッションごとにまとめて書かれた報告であった。

a. よかった点

第一部

- ・他大学の実習の様子を知ることができて刺激になった。
- ・自分の大学では扱われないテーマもあり、参考になった。
- ・弘前のグループでの調査は、東北大とはことなるかたちで、面白いと思った。
- ・ポスター前では意見や質問が活発に交わされていて、非常に良い形式だった。
- ・他大学との交流も(正直なところそこまで期待していなかったが)、面白い人がたくさんいて刺激になった。
- ・研究方法も自分たちとは異なるものを知ることができ、今後参考にしていきたいと思った。
- ・私たちの研究室の特徴というものも感じ取れたような気がする。やはり自らを見つめるためには他の文化との対比こそが必要。

第二部

- ・普段は自分の研究室の先生方のお話を聞く機会もそう多くはないため、こういう機会は貴重だった。
- ・まだフィールドワークをしていない2年生(おそらく)が、知らない人たちの中に入っ

ていくのがすごく不安というようなことを言っていて、ものすごく共感したのと、自分のときは意外とあっさり受け入れてもらえたことを思い出した。

・各々のエピソードには興味深い点が多く、そこでの紹介をきっかけに、続く懇談会で会話が弾んだ場面もあった。

第三部

・同じ大学生として、勉学のことだけでなく、一人暮らしやアルバイトのことまで話題は尽きなかった。本当に時間が短く感じた。

・空いた小腹も満たされ、いろいろな話を出来るというのは実にすばらしい。第三部は是非来年もお願いしたい。

・少し大学ごと固まってしまったような気もしたが、雰囲気もよく盛り上がっていたように思う。

全体

・普段は教室で教員の話聞くという受け身の授業が多いので、このような形のイベントは非常に新鮮だった。

・他大学の、特に自分と同世代の学生の話聞くという機会は意外になかったため、今回の試みは自分にとって非常に新鮮だったし、勉強になる面も多かった。

・開催意図の通り人類学の楽しさ、面白さが伝わってくるようなイベントだったと思う

・来年もぜひ行ってほしいし、今回会った方々にまた会う日を楽しみにしている。

・色々な人と交流して、色々な人の研究を知って、そしてそれで自分の考えが動かせる、まさに文化人類学を实践できたイベントだった。

・普段、なかなか接触することのない外部の教授陣・学生たちと交流することができたのは新鮮かつ貴重な体験であった。自分の研究についても改めて考えさせられたと同時に、新たな視野が広がったように思う。来年以降は、他大学を会場として交流するのもよいのではないだろうか。

b. 改善を希望する点

第一部

- ・パネルとパネルの間隔がもっと広ければよかった。
- ・ポスター掲示用のパネルが風で何度も倒れたらしい。この対策は必要である。
- ・ポスター前で意見や質問を聞く時間は取ってあるので、大教室内では簡単な題目説明程度だけでも良かったと思う。
- ・発表者が他のポスターを見に行く余裕がないので、時間を長くして、交代制にした方がよいのではないか。
- ・場所は室内にする。
- ・パネル発表でなく、最初の講義室で一人一人発表するほうが、皆が皆、お互いに満遍なくみられるのでは、とも思った。
- ・外での展示は open な雰囲気ではあったが、風によってパネルが倒れ、ポスターは落ち、写真も落ちるといったことが何度もあり、そのたびに対応に追われ、受付・会計係は第 I 部を見に行くことができなかった。外で展示をするためには相応の用意が必要だと感じた。
- ・会場が屋外で、さらに人数が多かったせいか、発表者の声が聞こえ難いことが多かったように思う。
- ・ポスター発表の前の各発表者による内容の紹介が長い気がした。事前の説明に時間を割くよりも、ポスター発表の時間を長めにとって、より多くのコーナーを回れるようにしたり発表を交替制にしたりして、発表者がほかの人の発表を聞けるようにしたほうがいいのではないかと思う。
- ・受付業務をされていて感じたことは、トイレの場所を聞かれた回数が多かったことだった。今回発表があった文 1 教室の下には男子トイレしかなく、(女子トイレは文 2 教室の下)今回は女子の参加が多かったため、トイレの場所を掲示もしくはアナウンスしておくべきだったと思った。
- ・口頭のみでの発表にはいささか退屈してしまった。パワーポイントのスライド数枚程度の情報(発表者・タイトル・要点・写真等)があれば、なおよかったのではないだろうか。

第二部

- ・時間が足りなかった。
- ・自己紹介をして終わりだった。
- ・もっとフランクなセッションを期待していた。
- ・担当教員によって差がありすぎ、また時間が短すぎる。
- ・教員側の一人ずつの返答が非常に長く、学生5・6人程度が質問して終了してしまった。
- ・グループ分けをしてローテーションでそれぞれの先生方のお話を聞きたいと思った。
- ・主に教員しかしゃべらなかったが、それぞれの班に実習をした学生を割り振り、教員に加えて、その学生の話も聞いたのならばさらによいものになったのでは。
- ・講師の略歴があつたら、その中から気になることを質問できるので、もう少しやりやすいかとも思った。
- ・第一部から第二部に移るときに、場所が分からなくてうろうろしている人が多かった。各グループの場所を割り振って、全員がわかるようにどこかに掲示するか案内のプリントに載せるかするとわかりやすいと思う。

第三部

- ・同じ大学の学生同士で固まってしまう所も多かったので、初めのうちだけでも第二部のグループでまとまっても良いと思う。
- ・食事がすぐなくなった。女子が多かったこともあり、お酒の分の費用を食事にまわしても良いかと思う。
- ・懇親会は時間が限られており、もう少し時間があればと感じた。飲み会は長い方が親睦が深まると思う。
- ・大学名入りの名札を付けていたのはすごく良く、ふり仮名、学年などがあればもっと丁寧かな、と思った。
- ・会場の広さと人数のバランスがあまりよくなかったように思う。次回は第一食堂の一角で行って見たらどうだろうか。

全体

- ・人数の割に場所が小さかった。次回も東北大でやるなら、萩ホールなど借りればよいのでは。
- ・全体の開始時間と受付開始時間を区切った方が良かったと思う。

4. まとめ

今回の「じんるいがくフェスティバル」を開催してよかったと思ったのは、学部生がどのように人類学を学ぼうとしているのか、実際に何を学んでいるのか、教師に何を求められているのか、大学の垣根を越えて知ることができたことである。以下では、高倉が感想を述べながら全体のまとめをおこないたいと思う。

第一部の学生の研究発表は、人類学が立ち上がっていく新しい瞬間に立ち会うような感覚だった。学部過程のなかで人類学を学んだ学生が、フィールドワークと格闘しながら自分で得た調査資料を整理し、そこから議論を立ち上げていく様が如実に表れていたからである。文化人類学を教えていると民族誌資料を紹介することになるので、どうしても日本以外の話題が多くなる。しかしながら、学部の過程で調査となると経済的なこと含めて様々な理由からどうしても国内が中心となる。したがって学生たちにとってみれば、教室や本で学んだことと、自分が可能な調査の間のギャップを感じざるをえないように思っていた。しかし第一部の発表を聞いていると、文献ではなく、自分が現場に飛び込み、そして場に参与することでえることができた「話」「見聞」を資料にして、そこから分析をおこなうことができるということ自体のおもしろさを学生が実感していることを、ひしひし私自身が感じる事が出来た。私自身、最近国内の調査をしていないこともあって、学生たちが身近な日常を参与観察し、そこから人類学的考察を立ち上げている様をみるのは大変刺激的であった。

第二部は、学生の感想でも触れられているが、今回の企画のおそらく最も目玉だったとあっていいだろう。教員が2人対談する形で、調査の裏話をするということはほとんどの学生にとっては初体験だったはずだからである。教員にしてみれば、自分の話を同僚や院生に語るということはあったかもしれない。しかし、同僚との対談という形で話題にする

のはなかなかない経験だと思われる。私自身がこの対談をおこなって感じたのは、人類学の教科書に書かれている調査方法論以外に、自分が調査のなかで何気なく行っていることを明確に言語化し、その方法としての妥当性を同僚とそして学生とともに話し合うことの心地よさだった。なぜ参与観察では、サンプリングとしての代表性よりも、偶然の出会いのなかに資料としての価値を見いだせるのかといった疑問。単に顔見知りの状態で得られる資料と、被調査者との深い人間関係をつくることによって可能となる資料の質とは何か。誰からでも得られる資料と、特定の関係を結ぶことによってしか得られない資料は、そのどちらかがいいということなのではなく、どのような問いをたてるかによって、必要となる調査の方法が変わってくる…等々。これまで自明視してきた諸問題が対談を通して明確になっていく過程は快感ですらあった。逆にいえば、自分はこれまで学生に対して実践的な意味を含めて調査方法論をどれだけ伝えることができたのか、という自問が残ったほどである。おそらく、複数の教師が自分の知識を一定の緊張感をもって相互に交換しあうというのが対談の特徴であろう。そのコミュニケーションが自分自身の人類学的知識の再認識に、さらに学生との双方向的教育という観点からの可能性を強く感じたのであった。

第三部の効用は、東北地区で人類学を学ぶ100人もの学生が一堂に会するという機会を作り出したことにあるとあってよい。生協の食堂会場のなかで自由に動きにくくなるほど学生が集まり、それぞれのテーブルを囲んでグループができ、歓談している。これほど多くの学生が人類学を学んでいるということ自体が、自分にとってはうれしく、そして頼もしくすら感じたのである。人類学で卒論を書こうとする学生がこれほどたくさんいるという事実を確認できたこと自体が、私には喜びであった。その反面、これだけ多くの学生に対してこれまで自分は何を伝えることができたのかと自問してしまう機会でもあった。私の場合、特に研究科や学部直接所属せずに、学内の研究センターにいるので、普段は学部生とのつきあいはそれほど多くはない。教養課程での文化人類学概論を教える以外には、専門課程では3年生用の半期の授業をもつだけなので、調査実習や卒論まで学生とつきあうという経験はない。それ故にこそかもしれないが、学部生への教育の可能性を今後はもっと深く考えていきたいと思った次第である。

ということで、じんるいがくフェスティバルを振り返りながら報告してきた。おそらく私の様な思いは関係者の間である程度は共有されていると思う。この原稿を書いている

2011年3月初頭の時点で、すでに2011年度に第二回のフェスティバルをおこなうことはほぼ確定しているからだ。この企画が繰り返され、蓄積されていく中で、教員・学生の間で様々な意味での人類学的な遭遇の可能性が広がっていくことを望んでいる。